



存在と記憶の
距離感

第一話
オパール

空は黒い雲に覆われて、どんよりと湿っぽい。あたりの空気も密度を増して重たい感じがするし、今にも雨が降り出しそうだ。そんな陰鬱な時は、静けさも「静寂」ではなくて「無音」という様な、「あー、またか。また雨かよ。」という意味合いに変わってくる

ポツリ。ポツリ。

雨は降りだして、点々とアスファルトの色を濃くしていく。そして、一度降り出した雨は、囷に乗って次から次へと。これは本降りだ。地面の色はすでに塗り替えられてしまって、落ちた水滴は飛沫をあげて跳ね返っている。

けども、外は雨が降っているけれども、僕にはそんな事は関係ない。部屋にいてベッドでゴロ寝しているのだもの。濡れないもの。

雨の日は外に出ない事にしている。靴の中に雨が入ってきて、靴下がじっとりと濡れてしまうのが気持ち悪くて嫌いだ。それに雨だというだけで、もう何かをしようという気力が湧いてこない。だから今、僕は家のベッドでゴロンと寝っ転がって、じっとして、何もしないでいるんだ。

ただぼんやりと天井を眺めている。天井のは板張りで、その木目をじっと眺めて迷路に見立てて遊んでるんだ。でも実際のところ、木目は木目以外の何物でもないのであって、だから当然迷路ではなく、迷路遊びをするには向いていない。そもそも、どこが入り口で、どこが出口かも分からない。だから仕方なく、目に付いた適当なところから始める。つまり、この木目迷路をしている誰かさん（僕はそれを上から見ている視点だ）は気がつくと言の分からない迷路の中に「いた」ということになる。なんだか可哀想だけれども仕方がない。

誰かさんは言も分からぬまま、途方に暮れる。でも、うろうろと歩き出す。ただ、見ている僕でさえも出口がどこにあるのか分からないのだから、そもそも、迷路ではなく木目だから、彼にとってはなおのこと理解に苦しむところだろう。

僕は木目迷路に飽きて、寝返って横を向いて部屋を眺める。木目にいた彼はもう二度と出れないだろう。僕が作り出した想像なのに、僕の視線から見放されてしまって。彼はこの後一生涯木目の中をさまよい歩くことになるだろう。可哀想に。僕の気まぐれで産み出されてしまったがゆえにそんな目に逢わなければならないなんて。

横向きの部屋、床も天井も壁になって見える。僕も床の方の壁に張り付いたベッドに張り付いている事になる。ソファも本棚も壁から生えている。そのままずっと横向きの世界を眺めていると、本当に上下の間隔がおかしくなってきた、本来どっちが

上でどっちが横だったのか分からなくなってくる。そうすると、その錯覚に体が侵されてきて、重力の間隔も曖昧になってくる。そして身体がぐるりぐるりと廻り出して、何だか落っこちそうになる。

小さいころおばあちゃんに連れられて浅草の花屋敷に行った。そこにたしか「ビックリハウス」という名のアトラクションがあった。それにはは、固定された椅子があって客はそこに座る。すると部屋が廻り出す。自分はちっとも廻ってないのだけれども壁や天井がグルグル回るもんだから、すっかり自分が廻っている気になって、落っこちそうになる。僕はそれが怖くて怖くて、必死でおばあちゃんにしがみついていた記憶がある。

そう、それで、今回はただ横を向いていただけなのに世界がグルグル回りだして、ビックリハウスの事を思い出したのだ。

気持ち悪くなったので、また寝返りを打って仰向けになる。と、また天井の木目が目に入った。でももう、さっきの迷路をうろついていた誰かさんはどこにも見当たらなかった。

ビックリハウスかおばあちゃんかどちらが原因かは分からないが、一つ昔の事を思い出したら次々に過去の記憶が浮かび上がってきた。でもそれらはひと繋がりのお話という感じではなくって、一枚一枚写真をめくっていくような、そんな浮かびあがり方だった。中には色がついていたりいなかったり、その記憶の中の誰かがしゃべっているものまであった。でもそれぞれ一つずつは短く淡く、すぐに次の光景に移っていった。

とりとめもなく昔の事を思い出すのは、僕にとっては別に珍しい事じゃなくて、眠る前だったり、今日のように暇でぼんやりとしている時によくすることだ。そして、比較的好きなことだ。

その新旧に関わらず僕の記憶はあいまいで断片的だ。いつの事だったか正確には思い出せない事も多い。そんな時、少し哀しい。そしてその哀しいのが切なくて、少し嬉しかったりする。まったくもって自己愛的だなあ、と自分でも思うのだが、行きつくあてのない感傷はたまらなく心地よく、僕は中毒している。

「ああ、こうやって思い出懐かしみながら、気づけば死んでしまっていたのならなあ。それがいいなあ。」

そんな風に思いながら浸るのが好きなのだ。

と、記憶のスナップ写真の中に一人の女の子が現れた。真直ぐで艶のある黒々とした髪、異様と言える程に大きな瞳、僕の頭の中に浮かんだその子はそんな印象が強調されている。そしてそのこぼれそうに大きな瞳で、その子は僕を見つめている。じっと、ずっと。

気になって、僕は記憶の自動再生をやめて、その子の事を思い出してみる事にした。

その女の子は蘭という名前だった。蘭と出会った時、僕は十六歳で蘭は一つ年下の十五歳だった。今僕は二十二歳だから、六年前の事になる訳か。六年、僕があとどれくらい生きる事になるのか分からないけれども、長い人生からすれば六年なんてあっという間なのかもしれない。振り返って思い出す程の長い年月ではないのかもしれない。でも、僕の今までの二十二年からすれば、六年というのはその三分の一か四分の一位を占めている訳だし、僕からすればそれなりに「大層な」昔の事のように感じられるんだ。

だから、十六歳の時の僕が一体どんな気持ちでいて、どんな事を考えて暮らしていたのか、精確には思い出せない。今、蘭という女の子と僕との関係について思い出そうとしている訳だけれども、その時の僕は何だか他人の様に思える。「ひと繋がり自分」というよりは、やっぱりどこか「僕の頭の中にいる少年」という感じがして、何とも言えない距離感を感じる。そして、その僕の中の少年が十六歳の当時に思っていた「正義」だの「恋」だのというのは、彼自身はしごく真剣にそう思っていたのだろうけれど、それを思い出している僕からすると、その真剣さがどこかおかしなものに感じられてしまう。

何だかうまく伝えられないけれどもとにかく、十六歳の時の僕を思い出そうとすると「懐かしさ」というよりも「距離感」の方が先行してしまうという事なんだ。それでも、今回に限らず僕は、十六歳の時の自分の事、そして僕と出会い関係した蘭という女の子の事をよく思い出す。そしてその度に心のどこかにに引っかかる様な感覚を覚える。もう終わってしまった事、僕の「今」とは二度と関わりを持たないであろう過ぎ去った過去が、今でも僕にそんな感覚を与え続けているというのはとても不思議な気持ちなんだ。

この刺を残した思い出が、その刺によって忘却を免れ、未だに僕の中にとどまり続けている、色あせて「距離感」を感じるようになった今でも。その「刺」とは一体

何だったのか、正直なところ僕は答えを出しかねている。だからこそその問い自体が刺として僕の中に引っかかっているのかもしれない。

ただ、あともうしばらくすると、それがいつなのか、五年後か十年後かそれよりもっと先の事なのか僕には分からないけれど、その刺が何だったのかという問いの答えを僕はもう二度と見つけ出す事が出来なくなってしまうだろうと思う。そんな気がしてならないんだ。だからこそ今、既に色あせて「距離感」を伴うようになってしまったこの思い出を、一つ一つ丁寧に紐解いていきたいと思うんだ。

さて、だらだらと前書きが長くなってしまったけれど、いよいよ僕と蘭の事について話していきたいと思う。ただ、どうしてこんな風に（距離感やら刺やら）前置きが長くなったかといえばそれにはちゃんとした理由があるんだ。つまり、僕と蘭について話そうと思った時に、そもそもの話の始まり、僕と蘭とがどうやって出会ったのか、それ自体がひどく複雑で、あまりに現実離れしていて、にわかに自分の記憶というものを疑ってしまったという訳なんだ。

「僕はこんな風に記憶しているけれど、それはそもそも本当なのか？」
という具合に。で、距離感やらなんやらの話になってしまったって訳なのさ。しかしまあ、今となっては自分の記憶以外に頼るものは無いのだから、思い出したそのままそのまを書きしかないのだけれどさ。

いい加減に始めよう。

僕と蘭が出会ったのは、真希が僕等と遊ぶ時に彼女を連れてきたのが最初だった。って言っても、これには大分説明が必要だろうな。

えーっとまずは「僕等」について。その当時、僕は中高一貫の私立男子校に通っていて、中学二年の頃から太一と正平の三人でつるんでたんだ。まあ、悪友って奴達だったな。人のいない駐車場で隠れてタバコを吸ったり、カラオケで酒盛りしたりさ。その時は僕らもご多分に漏れず思春期で、反抗期だったからさ。とにかくもう、何が何だか訳が分からなくて、無性に苛々して、誰かれ構わず逆らいたかった。かと思えば、夜中に無性に悲しくなって泣き出しちゃったりしてさ。情緒不安定を地で行ってた訳さ。

太一はひょろっと背が高く、物静かな奴だったな。まあ、僕等とはよく喋ったけど。よく本を読んでもる奴で、物知りだった。で、僕なんかは直情的な反抗児って感じだったけど、太一はそれと較べるとどこか冷めていて、ニヒルって感じだったな。そのニヒルな感じがその時の僕にはとてもカッコよく感じられて、いつも太一の後ろをひっ付いて回ってた。そんな僕に対して、太一は表向きは「なんだよ、ウゼエな。」みたいな感じなんだけど、実は内面熱い奴なんだ。よく彼の家に遊びに行っては、二人で（今聞いたら恥ずかしくて笑っちゃうような）人生の話について、あーだこーだよく議論してた。その頃の僕にとってそんな彼との関係はとても尊いもので、たった一人の「友達」だ、って思ってたな。とまあ、太一はこんな奴だよ。

で、正平。こいつはまあ、どうでもいいっちゃどうでもいいんだけど、だた話の流れ上後々の真希の事に繋がってくるから、一応。正平はねえ、一言でいえば顔が良かった。女うけのいい顔だったな。ただ、僕等が出会った頃はまだ中学二年で男子校だった事もあって、三人ともまだ童貞だったし、その、女にモテるとか何とかはあんまり関係なかったんだよね。まあそれが色気付くにつれて変わって行って、その後正平とはあんまり関わり合わなくなっちゃったけどね。イケメンって以外に正平がどんな奴だったかって言われると、うーん、普通の良い奴だったよ。太一とかとは違って、人生についての喧々諤々の議論なんてのもこれっぽっちもしなかったしな。ただまあ、普通につるむ分には何の問題もないから、中学二年、三年の時にはよく一緒にいたんだよね。そんな感じ。

そしてその当時、僕等は十五歳の少年としてしごく月並みに悶々としていた。まさ

にチンチンの奴隷といえる状態だった。寝ても覚めても頭に浮かぶのは女の子の裸ばかり。僕のチンチンはあまりに元気で、少なくとも一日に3、4回はしごいてやらないととともに日常生活を営む事が出来なかった。

ただ、有り余る旺盛な性欲を持て余していた僕らではあったけれども、その性欲が向かう矛先は実態が無く、ひどく観念的な情念であった様な気がする。早い話、男子校だった事もあって、僕等の身の回りには女の子なんていなかったから、誰かを好きになるという事が無かったのだ。だから、僕等の本能としての性欲は具体的な対象に向けて発散される事が無く、唯唯、自分達の体内脳内を循環して増幅されていく一方だったのだ。今から思えば、毎日毎日無性に苛々していたのも、訳もなく恐ろしさを感じたりしていたのも、大部分はこの行き場のない性欲のせいだったのかもしれない。

そんな妄想性欲地獄に喘いでいた僕に、ある日突然に「具体」というものが提示された。その「具体」を持ってきたのがイケメンの正平だった。問題に直面した時、それを解決すべく行動を起こせる奴ってというのは、脳みそでウジウジ考えている奴なんかじゃなくって、特に何も考えない奴なんだな、ってこの時しみじみと思ったっけ。

具体的に話せば、その日、授業が終わって、いつもの通りなんとなく三人で集まって、校門を出た。そしてこれもいつもの通りにくっちゃべりながらブランブランと高田馬場駅に向かって歩いてた。僕等の学校は新大久保にあったから、その界限を寄り道しながら帰るっていうのがお決まりのコースだったのね。校門を一步出た途端に何だか呼吸が楽になって、抑圧されていた自分が解放されたような気分になった。で、学ランの第一ボタンを外す。規律の大好きな学校だったから、学校の敷地内でボタン外してると先生に引っ叩かれるのね。

高田馬場駅への途中、学習院女子の制服を着た女の子達と頻繁に行き違う。その度に「真中がいい。」「いや、左だ。」なんていう風に三人で批評する。そんな僕達には目もくれず、楽しそうにお喋りしながら通り過ぎていく女の子達、眩しい。

「あーあ、あんな女の子達と一緒に遊んだりしたいな。」

僕は口癖になっている決まり文句を、飽きもせず繰り返す。と、二人ともいつもはここで「そーだなあ。」とため息交じりに返答してくれるのだが、どうも今日は様子が違う。太一はパイとそっぽを向いているし、正平はニヤニヤとこっちを見ている。

俄然興味の湧いてきた僕が、

「どーしたん、なんかあったん？」

と聞くと、正平は

「いや、別に何も無いけどさ。たださ、あれだよ・・・。」

なんてもったいつけながらも、その実話したくて仕方が無いらしい。

マックに寄って正平から聞き出した話を要約すると、先日女の子と二人で遊んできた、という事になる。その女の子は僕等と同じ歳で、名を真希というらしい。そして、僕の最大の関心事だったのが、どうやってその真希ちゃんとやらと出会ったのか、という事である。そのきっかけについても、正平は隠すことなくペラペラと話してくれた。しかし、そのきっかけというのが当時の僕等からすれば、いや、今振り返ってみても、あまりに現実からかけ離れた様に思えるものだった。

「いやさ、出会い系サイトをやってみたらさ、実際女の子からメールが送られてきてさ。俺、恐くなっちゃってさ、「実は俺十五歳なんだ」って返信したんだよ。したらさ、「えー、私も十五歳だよ。実は私、サクラやってるんだあ」ってメールが来たんだ。で、一気に仲良くなっちゃって、こないだ会って遊んできたって訳。」
正平はポテトを頬張りながら、愉快そうに説明してくれた。

が、聞かされた側としては何と反応したらいいものやら分りかねた。さっき太一がそっぽを向いたのも、これで納得がいった。太一は事前に正平から同じ話を聞かされていて、彼も僕と同じように返答に詰まってしまったんだろう。人は己の想像の範疇を超えた話をされると、喜怒哀楽の感情が湧きあがる前に啞然とし、次に当惑してしまうものらしい。

当惑の最中に、僕がまず思ったのは「本当か？」という疑いである。けれど、正平は嘘を吐く様な奴じゃないし、その無邪気な話しぶりからも、嘘をついている様には見えない。第一に、真っ先に嘘じゃないかと疑われる様な、そんなしょーもない嘘をついたところで、正平には何の得にもならないのだ。だから、どうやらこの話の内容は本当らしい、と僕は仮に信じることにした。

ただ、信じるとなると、それはそれでちょっとまずいんじゃないかな、と思った。出会い系のサクラをやっている15歳の女の子、一体どんな子なんだろう。想像のしようがない。

「お前それ、ちょっとヤバいんじゃないの？」

正平に聞くと、太一も

「そーだよ、ヤバいよ。」

と賛同する。が当の正平は、

「え、何が？別に普通でしょ。」

と、すっとぼけている。ちっともヤバいとは思っていないらしい。

その時の僕等は、キンキンに尖がってはいたけれど、やっぱりそれは中学生の坊やとして悪ぶっていたという事に過ぎなかった。言ってしまうえば、ごくありふれた反抗的な餓鬼んちょだったのであって、社会的な規範を踏みにじるとか、犯罪を犯すとか、そういった事とは無縁だったのだ。そんな坊やからすれば、やっぱり出会い系サイトは胡散臭い、いかがわしい以外の何物でもなかったし、その上サクラだなんて言えばそれは犯罪じゃんか、という話である。ヤバイ、と思うのは当然の感覚なのだが、正平にはそんな感覚はみじんも備わっていなかった様なのだ。

「いや、普通じゃないと思うよ。そもそもサクラとか、犯罪じゃん。」

と、至極真つ当なことを言うに至るが、正平は

「じゃあ君達も一緒に遊んでみる？そしたら別にヤバくないって分かると思うよ。」と、僕等をそのヤバイ事に巻き込もうとする気マンマンである。が、そういう風に誘われてしまうと、僕の中にも「怖いもの見たさの好奇心」がムクムクと湧きあがってくる。

「え、マジで？でも・・・、うーんまあ、じゃあ・・・、遊ぶ、かな？」

結局その次の週に、僕と太一は正平に混ざってその女の子と一緒に遊ぶ事になった。そしてこの時にであった女の子が真希であった。

真希はあらゆる意味で、僕等の想像力を遥かに突きぬけて、ぶっ飛んだ女の子だった。どのようにぶっ飛んでいたのか、うまく言い表せそうにないが、これらら話す僕等と真希との交友の話を聞いていただければ、分かっていただけだと思う。でも、あえて一言で言ってしまえば、真希は奔放な女の子だった、そう何物からも縛られずに、奔放だった。

先程の流れで、僕等三人は学校帰りに真希と遊ぶ事になった。正平の話では、真希は横浜の方に住んでいて、この日は新大久保駅までわざわざ来てくれるという事になっていた。正平がそう決めたのだが、その話を聞いて、僕がまず思ったのは

「横浜じゃ、新宿あたりまで来るのは遠くないかな？」

という事だった。が、正平にその事を聞くと、

「大丈夫だよ、あいついつも新宿ら辺をぶらついてるって言ってたし。」

との事。すっきりしなかったので、

「でも、学校終わってから来るんじゃ時間かかるんじゃないの？4時に待ち合わせじゃ間に合わなくない？」

と食い下がってみる。

「あ、それも大丈夫。あいつ、学校行ってないから暇みただし。」

「え、どういう事？」

ビックリである。

「それで、親は何も言わないの？」

「あー、言ってなかったっけ？親と仲悪くて家出してるんだって。」

「マジかよ。」

正平から聞かされる真希に関する情報は、その一つ一つに度肝を抜かれるばかりである。

「え、じゃあ、今どこに住んでるの？」

「えーっと、なんかねえ、両親が離婚してて、今は家出してるから元お父さんの家にいるんだって。」

「ふ、ふーん。そうなんだ。」

もう、何と反応すれば良いのか、まったく分からなくなっている。

そんなこんなを新大久保駅の前で話していると、ポン、と誰かが正平の肩を叩いた。

「お待たせ。」

「お、よう！」

真希、登場である。初めて女の子と会った時、まず気になるのはその容姿だろう。僕もその例外ではなく、まずは正平と話しているその女の子の容姿をチェックした。

まず目につくのは金色の髪の毛、大分手入れしていないらしく、根元から15センチくらいは黒い髪が生えてきてしまっている。顔は、可愛くはない、がブスでもない、かといって普通でもない、という何とも言えない感じだ。瞳は大きくて二重なのだけど、パッチリおめめという感じではない、そして、焦点が合っていないというか、どこを見ているのかよく分からない感じなのである。そのせいか、全体に顔から表情というのが読み取れず、何を考えているのか分からない。

背丈は当時165センチだった僕とほぼ同じくらいで、体系はデブとポッチャリの間くらいだろうか。

正平に聞かされた話からは、どんな子なのかというイメージがまったく湧かなかったので、いきなり現物がボンとでてきて、これがそれか、とただそのままを受け止めた、というのが真希の第一印象だった。以外でもガッカリでもなく、ただビックリの初対面だった。

存在と記憶の距離感 第一話

<http://p.booklog.jp/book/18121>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/18121>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18121>